

並に「クラプロット」の支那研究の有様を記して筆をとりて居られる。

蓋しかゝる種類の研究を集大成したるは實に氏のこの著述を以て嚆矢とするものと思ふ。氏が維多利亞資料をよく取捨して僅々二百五十餘頁の書物に纏められたる努力見識に敬服する。又諸研究者の略傳並に其の背景をなす時代の概略を述べられたる事は初學者にとりてこの上もない便宜である。只著者が人名地名に關して從來の慣例を襲つて、「ペーター」を「ピョートル」に「オゴタイ」を「エゲデイ」と改められた見識には敬服するも、一歩進めて其の原字を本文に示されたならば讀者の便宜はより大であらうと思ふ(著者自ら凡例に云はれる所ではあるが)又本書に於ては「クラプロット」以後に及ばない事は非常に物足りなく感ぜられる。然し近き將來に於て、これに續く力作が現れるであらう事を期待してやまない次第である。

今こゝに紹介するに當つて本書の眞價を傳へ得ない事を恐れる。願はくば親しく本書について一讀せられし事を切望す、

(共立社發行、現代史學大系第八卷、定價壹圓五拾錢)(山本)

● 東西交渉史の研究南海篇

藤田 豊八著

「東洋史研究の起りしより既に三十餘年、その間東西大學の教授及び出身者にしてこれに従事し、史界へ貢獻したるもの少なからず。而して西域方面の開拓者としては、先づ東京の白鳥博士、京都の故桑原博士を推さざるを得ず。その研究論文の發表

せられたるもの頗る多きは人の知る所なり。但南海方面に關しては、これに手を著けしもの少なく、その研究は西域方面に比して遜色ありき。然るに大正の初め頃よりこの方面の開拓を試み、突如として頭角を史界に顯はしたるものあり、これを故劍峰藤田博士となす」とは東洋史界の先達市村博士が本書序文の劈頭に題せられた一句であつて、故藤田博士の學績をよく言ひ表はしたるものと思ふ。故藤田博士は明治二十八年東大卒業後劍峯の號を以て支那文學哲學の方面に縱横の筆を揮ひ、やがて支那に渡り教育事業と操觚界とに活躍されて或は支那哲文關係の諸論文となつて現はれ或は時事問題を論じた經世策となつたと共に、その間に一面許多の書籍を蒐集讀破されて純手たる史的研究所を試みられ、殊に支那を中心とする東西交渉史の研究に没頭されたのであつた。其の成果が明治末年の歸朝前後より學界に問はれて遂に、此に一書をなせる南海篇に收められた諸論文となり、又やがて近く上梓の「西域篇」に收められる諸論文となつたのである。而して故藤田博士の研究が愈々進み學界均しく巨像を仰いだのは大正末期より昭和にかけて數年間であつて、明敏な頭腦と鋭利な觀察とにより前人未踏の新天地を開拓し斬新奇警な新學說は一時を聳動せしめられたのであつた。さて本書收録する所は大正二年一月東洋學報に掲載の「狼牙脩國考」以下、昭和二年十一月史學雜誌所載の「佛徒の印像につきて」迄の二十三篇に及び、何れも東洋學報、東亞研究、藝文、史學雜誌東洋時報、史林及び白鳥博士選厝記念東洋史論叢に掲載された

南海關係の研究の雄篇に外ならぬ。勿論その間一、二故博士の速断有り、誤解の點なきにあらざれど該博なる考證、精透なる斷案はよく、學徒に對して向學の指針となり、南海研究唯一の羅針盤たるは何人も信じて疑はぬ所である。今本書を手にして故博士の風貌眼前に浮ぶ如く、又故博士の學績を長へに傳ふる好個の記念物たるを固く信じ敢て江湖に薦むる次第である。(池内宏編、東京岡書院發行、定價六圓五拾錢)

### ●影印三國史記

今西 龍監修

三國史記の舊印本の世に存するものに二種あり、一は正徳壬申(七年)慶州で李繼福が慶州刊本(李朝太祖二年甲戌)を重刊した稟本で、他の一は後世宣祖以後に印行された活字本である。前者は内地に於ては前田家及び京大河合氏舊藏本に零本あり、朝鮮にては奎章閣(此の藏書全部先般京城大學に移管せらる)、總督府及び玉山書院に夫々又零本を藏し、此中にて奎章閣本と河合本と合して完本をなすと云はれて居る。又別に慶州某氏の所藏に完本一部有りと聞く。活字本は之に比べれば其の數多く朝鮮のみにも多數部の完本を得ると雖、これ亦稀で又誤植多く良本と云ふ事は出来ない。故に嘗て東京大學にて坪井博士校訂の下に活字本三國史記が出版されて學界の翹望を充されたが、不幸にも大正十二年の震災後絶刊となつて今日手に入れ難く、此東大本に次いで朝鮮古書刊行會、光文會より同じく活字本の印行有つたが、これとて近年に至つては漸次購得する事困難と

なり、朝鮮史研究上に一大障害を生ずるに至つた。かゝる時昭和三年二月に於て京城大學今西博士の校訂にかゝる活字本三國史記が上梓せられ、學徒争ふて之を購得し多年の渴を醫する事を得たのであつた。然るに更に今回同じく今西博士の御奔走御努力により舊木版一葉十八行、一行十八字美濃紙版の三國史記が完本として原寸大に影印され、朝鮮印刷株式會社の厚意によりて世に出る事になつたのは、獨り朝鮮史界のみならず、日本古代史研究家にとりて甚だ祝福すべき快事と云はなければならぬ。但し今回印行の影印本にては一字二字の缺字の個所はそのまゝにしてやがて出る筈の今西博士稿解説の條にて補はるゝ豫定の下に、其蠹魚の害甚しい所のみ、特に朱字を以て補刻し能ふだけ完全を期せられたのは、實に學徒の裨益せらるゝ所大なりと云ふべきである。三國史記の朝鮮及び日本古代史の研究上に於ける史料としての價値の如何に大なるかは今更啜々を要せぬ所であつて、從來不完全とも云ふべき「三國史記」によつて研究のなされた方面にこの良書を以て新なる研究起り新分野の開拓されん事を祈るのは獨り筆者の希望なるのみならず、學界の均しく待望する所以のものである。尙又かつて京師帝大より縮刷コロタイプ版にて出版された僧一念撰の「三國遺事」も既に原寸大に影印成つて近く學界に提供される筈と聞く時、我々はこの双璧を得るの喜を心から祝福して止まないものである。而して今や兩書印成つて世に出んとするに當り、この影印刊行に奔走され解説の役に當られた我等の恩師今西博士が去る五月二十

日京大史學科に於ける數次の講授の後突如腦溢血の爲卒倒せられ、遽に逝去さるゝに至つたのは眞に痛惜に堪へない所であつて、此の朝鮮史界第一人者を失つた事は當に我學界の大損失たるばかりでなく、世界學界の損失と云べきであつて、今やこの書を手にして殘恨愈極りなく謹んで恩師の靈を弔すると共に、此兩書の印行を恩師永久の記念として江湖に推薦する次第である。(全九冊、昭和六年十二月。朝鮮印刷株式會社内古典刊行會發行發售、定價未定)

●清太祖實錄 北平故宮博物院刊

最近兩三年の間明末清初の史料の刊行相續いで出た事は我々滿洲學徒にとりて絶大の喜と云はねばならない。殊に明清史料十本、同續編たる三藩史料の刊行、或は朝鮮迎接都監儀軌一本のやうな特殊史料の印行の外、殊城周卷錄、全邊略記、三朝遼事實錄の如き清朝時代禁書の中に入れられて、容易に手に入れ難つた貴重な史料文獻が、時勢の變化と支那に於ける學問の進歩とに促されて容易に出版され、然も廉價版として世に出た事は學徒にとつて至上の快事とする所である。これ等のものゝ有つ所の史料價值は今更贅言を費さずとも世人周知の事であつて、何れも明末清朝の研究家の必讀せざるを得ない貴重なものである事を俟たぬ。而して今はこれ等に就いて詳述するを避け唯一つ同じく明末清初の史料として清太祖實錄の印行を紹介したいと思ふ。

清太祖實錄は通常、太宗實錄、世祖實錄と共に合して三朝實錄と呼ばれて居るが、此の實錄に康熙年間の刪修本と乾隆年間の改修本とがあつて、前者の有つ價值の大なる事は夙に認められ、我日本に於ても早くも文化年間に柳山芝鳩、永根氷齋の二氏の手にて此書によつて清三朝實錄採要及び大清三朝事略とが出版された事は非常な驚異とする所である。而して其の清三朝實錄採要の原本となつたのではないかと思はれる康熙刪修本清三朝實錄は今、内藤湖南博士の珍藏に歸して居り、又別に東京大學第一高等學校等に一部を藏すと聞いて居るが、これは何れも稀觀の書であると共に、乾隆改修本とても容易に觀るを得なかつたものである。然るに昨春には北平故宮博物院から「清太祖努爾哈赤實錄」の印行有り、今年に入つては同所より別に「清太祖武皇帝努兒哈奇實錄」の刊行有り、又別途の刊行物として奉天より「滿洲實錄」が世に出でて、我々學徒はこの一、二年の間に從來購得の至難とされ稀觀の書であつたものを容易に相續いで手にする事を得るに至つたのは何にもかへがたい喜びである。右の中「清太祖努爾哈赤實錄」はその卷頭に附せられた上表によつても分るやうに乾隆改修本の覆刻であるが、「清太祖武皇帝努兒哈奇實錄」は康熙刪修本より更に古い實錄の覆刻でないかと思れる所に異常の興味を覚える。「滿洲實錄」は正しくは「太祖實錄戰圖」と呼ぶもので繪入の書で滿蒙漢文の三體で認められて居り、其體裁は康熙刪修本よりも古く、近印の「清太祖武皇帝努兒哈奇實錄」と相類するものでないかと思れる。今、内藤博

士藏康熙刪修本とこの三書を併せて、各書に記されて居る滿洲人名地名の譯字をみるに、最初の一二葉の中に於てさへ次のやうな異同を舉示する事が出来るのである。今、武皇帝尊見哈奇實錄を(1)、滿洲實錄を(2)、康熙本太祖實錄を(3)、努爾哈赤實錄を(4)として數個の例を擧げる事にする。

(1) (2) (3) (4)

熬莫惠 鄂謨輝 俄漢惠 俄漢惠

熬梁里 鄂多理 俄梁里 俄梁里

黑禿阿喇 赫圖阿拉 黑圖阿喇 赫圖阿喇

除烟 褚宴 褚燕 褚宴

拖落 安羅 安羅 安羅

脫一莫 委一謀 委議談 委議談

石報奇 錫寶齊篇古 錫寶齊篇古 錫寶齊篇古

范味 樊察 范察 范察

右の例で知る如く(1)は譯字最も古奥を帯びて居り、(2)之に次ぎ(3)(4)は略同じで譯字が整頓されたものと云つて差支ない。又肇祖及び興祖を記すにも、(1)では都督孟特木と都督とし、(2)では都督孟特穆と都督福滿とし、(3)では肇祖原皇帝諱都督孟特穆と興祖直皇帝諱都督福滿とするに對して、(4)では單に肇祖原皇帝と興祖直皇帝とするのみで諱を略して居る如きも、亦その時代の前後に本く書法の變化を認め得ると思ふ。其他かゝる例は枚擧に遑ない所で、その内容の具體的事實に就いても同様で、かの太祖歿後の事件としてやかましい吳喇國大福金の殉死の件に就て

(1)(2)(3)には凡て太宗等が強要した事を明記して居るに反し(4)には單に以身殉と記すのみで詳しい事情を述べて居らぬのも、乾隆改修の如何なるかを察知するに足ると思ふ。かゝる次第であるから史料としては前の三者の價值の大なるを認めべく、その中でも(1)が特殊の價值ありて他の二つ之に繼ぎ、(4)は整理されただけ價值は減ずるかと思ふのであるが、無論参照はしなればならないと考へる。然し要するにその間の價值には異同ありとは云へ、かゝる幾種類のものを集めて比較考證の上清初の歴史の探究に當る事を得るに至つた事は、この方面の研究に携はるものとして衷心喜びに堪へぬ所であつて、此にかゝる史料文献の印行を祝すると共に今後この方面の研究の一層進まん事を學徒として切に祈つて止まぬ次第である。(京都葉文堂取次販賣。詳くは同店に問ひ合せの事)(以上、悠淵)

### ●日本資本主義發達史講座

明治維新に關する歴史の考察は、今日その數實に夥しいけれども、實に於て尙遺憾なきを得ない。殊に幕末より維新政府樹立に至る歴史事實の分析に於て國內的事情に目を奪はれ偶々對外關係を取扱ふ場合もあるも、これを世界資本主義發展の一環として理解せざる場合が多かつた。換言するならば維新政府の樹立を、日本史の過去に關係せしむるに努め、これをその將來、即ち現代社會に關聯して解せざる難點があつた。

最近に至りこれ等の缺陷を補ふに足る論作相次いで發表せら